

最後の道

白百合学園高等学校 二年 白井 莉奈

「道」と聞くと真っ先に思い出すのは私の祖父だ。老老介護の末、妻に先立たれた祖父は、墓石に刻む思いのこもった一文字を自らの座右の銘である「道」とした。武者小路実篤の名言「この道より我を生かす道なし、この道を歩く」を掲げた部屋で晩酌を欠かさなかった祖父。「自分にやれることを生かされている間にやる、目の前のことに逃げずに取り組めば自然と道は開けるんだよ」と話していた。そんな祖父は祖母の三回忌を終えると、後を追うようにして旅立った。そんな祖父の生き様について書いてみようと思う。

祖父は昭和一桁生まれで、私たちの世代とは離れすぎていて経験したことや考え方は正直わからないし、調べたところで祖父を理解できるわけではない。学校が休みに入って会いに行くと、孫の私をとても可愛がってくれ、沢山の思い出ができるようあれやこれやしてくれた。病弱な祖母の面倒を言いながらも頑張っていたのを覚えてる。祖父は口癖のように「七歳も下のお嫁さんをもらったから、自分の世話を任せられると思っていたのに、頼りにならないなあ」と言って笑っていた。

そう、祖父は結婚してからずっと身体の弱い祖母を気遣って生きてきたのだ。祖母が亡くなり、しばらくは色々な手続きや遺品整理に追われていた。しかし三回忌を終えてから急に元気がなくなった。決まって口にするのは「やることがない」。冬休みに訪ねると随分痩せて衰弱していた。口数も少なく、こたつで横になっている時間が多くなった。祖父は大変な思いで老老介護の日々を重ね、祖母が亡くなった後に毎日の生活の原動力を失った。身体の弱い祖母と歩んだ「道」には、祖母を失った後の道しるべがなかったのかもしれない。

私が祖父と共にした最後の「道」は、初詣に一緒に行った時の、長くて急な石段だった。「じいじはこの石段、全部登れるかなあ」と口にしたので驚いた。目の前の石段に挑戦するような眼差しをしていた。「車で待ってる？そんな薄着で寒いでしょ、無理しないで」と母も声をかけていたが、「いや大丈夫」と言葉少なに石段を見上げていた。本当に寒い冬だった。上着を着るよう言っても聞かない。でもやっぱり震えていた。一段、一段、ゆっくりと登っていく。祖父が歩んだ「道」を、人生を噛み締めるように。途中で休みながら。私が幼い時は祖父が手を繋いでくれてゆっくり上っ

た石段だ。「頑張れ、上には綺麗な孔雀さんがいるよ」「お参りしたらおみくじも引こ
うね」と話して私を励ましながら何回も一緒に上った石段だった。祖父に甘えて抱っ
こで上がった先では立派な観音様が優しく迎えてくれるのだ。大きくなった私にはも
う何ということもない石段に、祖父はため息をついて辛そうに挑んでいる。祖父の気
持ちに寄り添い、皆でそのペースに合わせた。後から来た参拝者にどんどん抜かされ
ていく。邪魔だと言わんばかりの顔を向ける人も、大変ですねと同情の目を向ける人
もいた。私はどうすることもできず、ひたすら祖父の背中に手を添えるだけで胸がい
っぱいだった。体の弱った身となってもなお、自分の足で歩く祖父の気丈な姿を今で
もよく覚えている。やっこのことで境内につくと、お焚き上げが行われ、厳かな雰
気の中で皆が初詣をしていた。新年祈祷の太鼓が鳴り響く中、祖父は何を祈ったのだ
ろうか。祖父と過ごした短い冬休み、また独りにしてしまうことが心配だった。「春
休み、またおいで、じいじ待ってるよ」と握手したのが永遠の別れになろうとは思っ
てもいなかった。別れは急にやって来た。

独居老人の登録を区役所に届け出ていた母に連絡がきたのが初詣の日から一カ月
後だった。「新聞がポストに一週間分溜まっています。どこかに出かけられています
か？」という内容だった。孤独死だった。一週間前に母が祖父と電話で話していたの
でその後間もなく体に変化があったのだろう。祖父は自ら「道」と刻まれたお墓に入
っていった。

老老介護は先の見えないトンネルだったと思う。高齢で体力が衰えると介護の際に
かかる身体的負担は大きいはずだ。仕事人間だった祖父は地域の交流も少なく、孤独
も感じていただろう。子供に迷惑を掛けたくないという思いで、自分でどうにかしよ
うとしていたようにも見えた。母がどんなに心配しても、大丈夫だと笑っていたのが
思い出される度に悲しい。

自分の伴侶を看取り、最後まで頑張った祖父。「自分にやれることを生かされてい
る間にやる、目の前のことに逃げずに取り組むんだよ」と話していた、祖父の「道」。
自分で決めた「道」だからこそ、自分を生かすことができると思っていたに違いない。
私も進路について真剣に考える学年となった。自分を生かす「道」を見つけられるだ
ろうか。新型コロナウイルスの影響でもう随分お墓参りに行っていない。行ける時が
来たら、墓石に刻まれた「道」の一文字を私の心にも刻んでこようと思う。